

# 「光明」と「熊谷」

—古典品種の系譜を探る—

野口 慎一



図版①「光明」の花（小平市）  
花柱は先で少し分かれるが合着して1本で雄蕊群より長く突出する

「光明」は良く伸びる丈夫な木で、私の所でも大きく育っています。根元で幹回り70cmぐらいあります。父が植えたのはいつの事かわかりませんが、6～70年は経っていると思います。『園芸大辞典』（石井勇義編 誠文堂新光社 1955）には「光明」の花の写真も紹介されています※図版①②。

埼玉県川口市の皆川椿花園の番付風な一枚刷りのカタログ「新撰椿花集」の昭和24年版に初めてその名前が現われます。「朱紅ノ一重最大輪」と説明されて、新花之部にデビューしています※図版③。古木が各地にありながら、「光明」は昭和になって新品種として認識されるまで、その存在が有名品種である「熊谷」の名の下にまぎれてしまっていたと言う事も出来るでしょう。関東でも在来の品種、「朝鮮椿」（後出）とはっきりと区別され得なかった経緯が想像されます。中部地方でも、「光明」は今ではよく知られた品種ですが、古い時代には園芸品種として歴史の表舞台に出ていなか

たようです。江戸初期からの園芸品種も多く収載している『椿花図譜』（宮内庁蔵 1700年頃）の古図の中にもこの人目を引く大花と思われるものはありませんでした。肥後椿の「羽衣」は「光明」と同じものだと言われています。雄蕊の形を重要視する肥後の人々の審美眼が、いち早くこの花を見出ししていたのです。

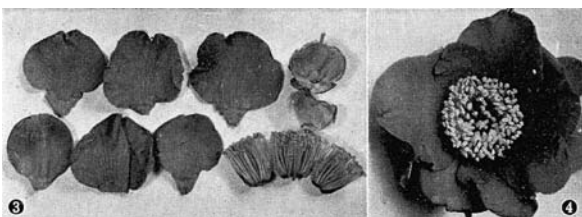
一方この「光明」に似ていて、関西では古くから知られている品種に「熊谷」があります。どちらも同じ品種であろうと考える方があったり、それぞれ研究者や栽培家の間でも意見が分かれていて、本質的には混乱があります。そもそも本当の「熊谷」がどういう品種か、東京に住む私にはあまり馴染みのない品種ではあるのです。

古い資料として私が注目したのは、やはり『椿花図譜』でした。この第543図の「ツンボ大工」は、研究者が明らかに今日の「熊谷」であろうとしていたからです※図版④。この図を細かく観察すると太い雄蕊群の中

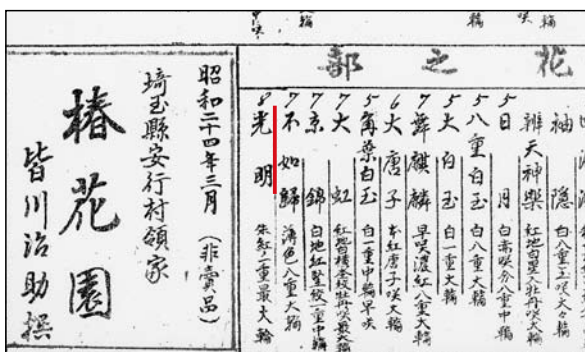
部に白く雌蕊が元から分かれて描かれているのに気がきました。花全体からすると些細な点ですが、このことが一見して区別が付かないように似ている品種を同定する上で重要な手がかりとなりました。つまり、正当な古品種「熊谷」の重要な特徴は子房の元まで分かれる花柱を持つ事であるのです。「熊谷」と言われる品種が何系統であろうとも、まずこの雌蕊の特徴を持たないものは古品種「熊谷」ではあり得ない事になります。

「熊谷椿」の名前は江戸時代の初期の椿マニアの公家の日記『時慶卿記』（西洞院時慶 1633）や『椿花図譜』にもすでにありますが、『椿花図譜』の第509図の「熊谷椿」は濃桃色のヤマツバキ形の花が描かれていて、今日の「熊谷」とは同名異種と考えられます。

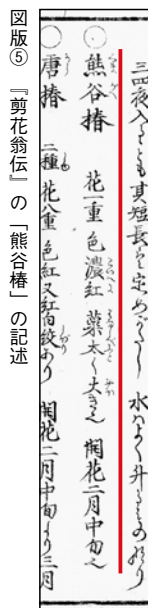
今日の「熊谷」と同一と思われるものは、『諸色花形帖』（撰津、東山村吉右衛門 1789）に、「熊谷 本紅一重平ノ勾咲大シベ又は才出ル時モ有」とあるのが初めて



図版②『園芸大辞典』の「光明」の花とその分解図



図版③ 番付風カタログ「新撰椿花集」の新花之部に載る「光明」の名



図版④「剪花翁伝」の「熊谷椿」の記述



図版⑤『椿花百種』の「朝鮮椿」の図（『椿』日本ツバキ協会 22号より）



図版④『椿花図譜』の第543図「ツンボ大工」（講談社版より）

です。（才とは旗弁の事でこの特徴も別図、第414図の「ツムボ大工」に描かれています。）また『剪花翁伝』（浪花 中山雄平 1847）でも「熊谷椿」は引き継がれています※図版⑤。赤の大輪花に「熊谷」の名を与えたのは撰津の人です。撰津は源平合戦の古戦場です。有名な一ノ谷の合戦にまつわる話が大阪でも歌舞伎化されたのは1752年（宝暦2年）の事であると言います。この花の印象を熊谷直実にととえたのでしょう。

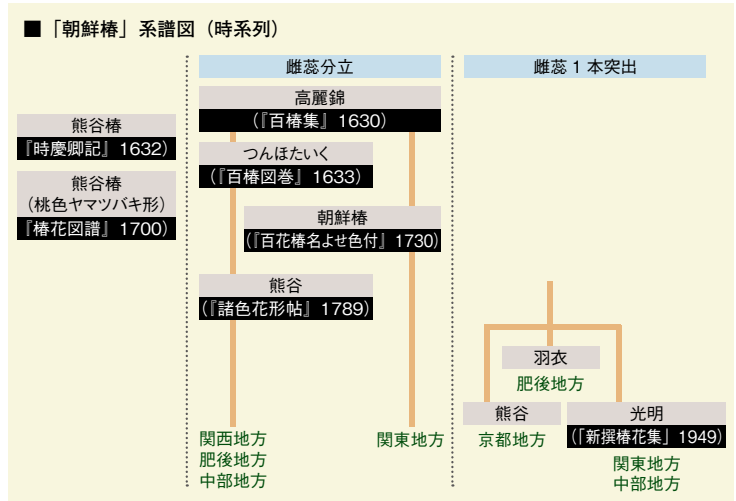
さて、『日本椿集』（津山尚・二口善雄、平凡社 1966）で「光明」は宝鏡寺の「熊谷」によく似ていると説明されています。季刊『銀花』（第56号 文化出版局 1983）の京都の写真の中に宝鏡寺の「熊谷」の花のアップの写真があります。これには横向きの花も写されていて、白く雌しべが1本長く雄蕊群からとび出しています。このことはこの椿が『椿花図譜』に載る古品種「ツンボ大工」（＝「熊谷」）とは別の品種であることを示しています。

茶色の一筋を生ずる。花瓣は長さ、幅共に2cmのもの30枚、花径9cm。4月中旬開花。挿木發根不良、栽培困難。盆栽に適 93てうせんつばき（朝鮮椿）立性で伸長不良、枝は太く密。花は一重咲、やゝ捻れ気味、朱紅色、瓣は長さ5cm。幅3cmで7~8枚、花径9cm。4月中旬開花。挿木發根良。庭木、盆栽に適 94てふち

図版⑦『園芸大辞典』の「朝鮮椿」の解説



図版⑧ 川口市の古い園芸農家のところで栽培されていた「朝鮮椿」雌しべが突出することなく雄蕊の間に元まで分かれた花柱がみえる



関西の「熊谷」と対比される品種に関東の「朝鮮椿」があります。この品種名は現在別の品種に与えられている場合があり、本当の「朝鮮椿」の実体はよくわからなくなっていました。

この「朝鮮椿」については吉沢雪菴の描いた『椿花百種』（明治15年）に詳細な写生画があることがわかりました※図版⑥。「朝鮮椿」の最も新しい解説は『園芸大辞典』にあります※図版⑦。石井勇義氏の記述は具体的ですから、少なくとも昭和中期までこの品種が確認されていた事がわかります。それならば行方不明になってからまだ時間が経っていません。もう一度探し出せるのではないかと考えて調査してみました。川口市の古い園芸農家の所で栽培されているもの（名前がわからない）が吉沢雪菴の図にそっくりである事がわかりました。これは「朝鮮椿」を再発見することが出来たこととなります※図版⑧。

吉沢雪菴の図（図版⑥）をよく見れば、花柱が3本大きく分立している事がわかります。この雌蕊が130年前に描かれた『椿花図譜』の「ツンボ大工」の図（図版④）と全く同じです。「ツンボ大工」が「熊谷」ならば、また「朝鮮椿」も「ツンボ大工」なのです。「朝鮮椿」は関東名、「熊谷」

は関西名ということが出来ます。このような園芸的な文化圏についての考察が、日本の古典品種について理解を深める事の一助となれば幸いです。

さて、「つんぼたいく」は『百椿図巻』（1633）で唐子咲のように雄蕊が花弁化した花が描かれています※図版⑨。『百椿集』（1630）の作者、安楽庵策伝和尚が見ていた花もそのように咲く花ではなかったかと考えてみると、「高麗錦」と和尚が名付けた花がそういう花であることがわかりました※図版⑩。「高麗錦」は「赤の大輪で雌蕊がなく元が赤く薄色や黄色の葯がまじった旗弁の先が白っぽい」とあるからです。和尚が『百椿集』で集めた椿に与えた名前は、世間とは別に勝手につけた独創的なものでした。そのため今日まで伝えられたものはないと言われていました。「高麗錦」の名が江戸に伝わり、椿園芸の中心が江戸へ移ろうとする時に、高麗国はすでに滅亡していたために、「朝鮮椿」と名が変わったのではないかと考えてみました。椿園芸の父とも言われる和尚の命名が今日まで伝えられたのだと考えることは、この秀花を400年前の歴史上の人物と一っしょに楽しんでいるのだというような感動を私に起させるものとなりました。

注：ツバキの品種名は便宜上「」で表記しています。



図版⑨『百椿図巻』の「つんぼたいく」の図（『古文書に見る日本のツバキ文化史』より）

士高麗錦  
六葉有赤椿ノ大輪。七日有。間々切レテ。葉ナキ花ノ回幅一寸程ニ餘リ。長ク短ク開キ。中ニコソデヒント重リ。本ハ赤テ先キ薄色ニ白キ様ナリ。又先ニ黄ナル莖交リタリ。世人是ヲ黄白フトラ愛スル。予ハサハ思ハズ。春ノ夜ノ深ク開キニ。山路ヲ行ニ風ニ物ノ色ノ見ユルハ。

図版⑩『百椿集』の「高麗錦」の記述（『続群書類従』より）